

「今、私の晴雨計は！」<sup>⑭</sup>

「ウズベキスタンの空を見上げて」<sup>1</sup>

平山征夫

5月中旬、ウズベキスタン・ツアーに参加した。昨年イタリア旅行に初めて男だけで参加し、妻不同伴の気楽さ(?)を知った自称「新潟の老人ホーム」3人組の2回目の旅だ。尤も気楽なのは妻たちの方も同様で、私たち男が出かけてすぐ妻たちは寿司屋で「女子会」を盛大に開いたようだし、私の妻などは「じゃあ、私は娘のところ(実は孫)に行ってくる」と言っただけでヨーロッパに出かけて未だ帰ってこない。この歳になればそれぞれ好きにするのも良いだろ

う。いずれ天国(?)に行く時は別々なんだから…。

中央アジアにはウズベキスタンを含めて「スタン(・の国の意)」のつく国が5つ、アフガニスタンを加えると6つある。覚えられないでいたら、誰かが「カトウタキ」と女優名で覚えればよいと教えてくれた。それ以来大丈夫だ。その中でもウズベキスタンは、長安からローマまでのシルクロードの中間に位置し、古くから交易で栄えたところだ。十三世紀のジンギスハーンの侵略の後、十四〜十五世紀にかけてチムールが出現、大帝国を打ち立てた中心地域である。「青の都」サマルカンドはその都だ。昔から砂漠のオアシス都市として隊商が行き交い、

人々が交流し交じり合い人種るつぽを形成してきたところだ。

こんな食事やホテル・トイレが今一のところには女性の参加者などいないのだろうと思ったら、3人のひとり参加者がいた。聴いてみると「あの模様が好きだ」とか「市場がすごい」など、なかに「こういう汚いところの方が生きていく感じがして好き」と言う。我々は3人で一人前だが、この人たちは何処でもひとり参加するという。たくましい限りだ。同時にやはり他人への興味は強いのか「何をやっておられますの」と聴いてきた。打ち合わせ通り「新潟の老人ホームから来ました」と答えると疑わしそうな目で我々を眺めていた。

何よりも悠久の地球の営みを

感じる旅だった。昔からウズベク人、タタール人、タジク人、ペルシャ人などがラクダに揺られて行商していたのだ。そんな昔、言葉や決済はどうしていたのだろうか？今は観光地での土産物は現地通貨の“スム”ではなくドル決済だ。品物に原則値段は付いていない。「これ幾ら」と聴くと昔我々も使っていたあの大きな電卓が出てきて、例えば「30」と叩いて値段が示される。それを見てこちらは電卓に「20」と打ち返す。すると商人は「27」とくる。これを繰り返して値が決まる。昔からのやり方に電卓が加わっただけなのだろう。交渉力が試される。面白いと思うか面倒くさい

と思うか、日本人の反応は分かれ  
時だった。

(平成二十八年六月六日)

る。一度など私は「20」と打返した積りでいたら、相手が目の前に電卓を突き出したので良く見たら押し間違えたのか「0」となっていた。

最後の日の朝方雨が降って止んだ以後はずっと快晴だった。

“天気男”の私としてはまたまた面目躍如だった。日中の日差しは日本よりはるかにきつい、湿度は低く日陰に入れば爽やかだ。空は抜けるように青い。その空の青と張り合おうというのか同調しようというのか、「モスク」の屋根の藍が一段と美しい。世界遺産「レギスタン広場」で空を見上げながら「青」に染まったひと時は、宗教に関わりなく「至福」のひと

# インタビュー

英国の経済学者ケインズ(1883~1946年)研究の泰斗として知られ、積極的に社会問題への提言を続ける京都大名誉教授の経済学者伊東光晴さん。理論と現実を往還する思索の原点には戦争体験がある。

「宇宙のロマンが社会のロマンに変わったんだ」。自宅の書齋で伊東さんは、2006年に死去した恩師の経済学者都留重人さんから、亡くなる直前に贈られたという河上肇(1879~1946年)の書を眺めながらゆっくりと語り始めた。

27年東京生まれ。中学時代に「キュリー夫人伝」を読み、極微の世界の解明が宇宙発生の謎を解くことにつながる「ロマン」に引かれて、物理学を志した。

だが太平洋戦争の情勢が悪化した44年、徴兵を避け、「生き永らえるために」入学した陸軍経理学校では、下士官に徹底的にしこかれた。「天皇の名においてとにかく殴る。軍と社会の野蛮性を知った」と振り返る。

## 経済学者 伊東光晴さん



自宅の書齋でインタビューに応じる伊東光晴さん=東京都中野区



東京外語大教授時代の伊東光晴さん=1969年

### 理論と現実 埋め続け

### バブルにいち早く警鐘

「理論と現実の間に埋め続け」という思いがずっとあった。伊東さんが62年に著した「ケインズ」(岩波新書)は、思想的な背景からその学説をたどった解説書として今も版を重ねている。「効率の追求、分配の公正、個人の自由という、時にぶつかる三つをいかに実現させるかをケインズは考え続けた」。その後、

### 米資本主義の本質を照らす

伊東光晴さんが3月に刊行した新著「ガルフレイス」(岩波新書)は、「ゆたかな社会」なる

の著作で知られる米国の経済学者の生涯と思想をたどり、自身の日米経済の分析を交えながら米国の資本主義社会の本質を浮かび上がらせた。病床の都留重人さんに書くよう勧められた一冊でもある。

伊東さんは同書を、武將真田幸村が大坂冬の陣で築いた出城「真田丸」に例える。「本丸から理論を二の丸から学説史を携えて、現実の経済政策という戦場に赴く。経済学の最前線の闘いなんだ」。からからと笑うそのまなざしは真剣そのものだった。

新古典派が復権し、世界的に規制を廃し競争を徹底する流れが強まったが、格差拡大など機能が不全が目立つ今日、見つめ直す価値があると伊東さんは考えは「タメだ」と断る。

2014年刊行の「アベノミクス批判」(岩波書店)は、「異次元の金融緩和」など第2次安倍晋三政権の経済政策の効果を理論、実証両面で完全否定して話題を呼んだ。

国の財政悪化が進み、地域が疲弊する中で「万能の処方箋はない」と伊東さん。「経済成長は望めないかもしれないが、人口減少には良い面もある。住みやすい社会がつけられるのか。今こそ経済学の真価が問われている」

バブルの最中にいち早くメカニズムと危険性を指摘し、90年代を通じて公共投資による景気

返る。疎開先で終戦を迎え、帰郷して都電に乗った。いすのない運転台で、立ちっぱなしの運転士を見て涙が出た。自身も経理学校では、起床から就寝まで座ることが許されないつらい日々を過ごしたからだ。「あの時から、労働者の暮らしを良くしなくて

はという思いがずっとあった。伊東さんが62年に著した「ケインズ」(岩波新書)は、思想的な背景からその学説をたどった解説書として今も版を重ねている。「効率の追求、分配の公正、個人の自由という、時にぶつかる三つをいかに実現させるかをケインズは考え続けた」。その後、